第16期「教師力養成講座」を終えて
「生徒一人一人を大切にした授業と学級づくり」

受講生氏名：樋口　航生

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私は、学校インターンシップや「はんなり」教員養成プログラムなどで、授業見学や机間指導、ホームルーム活動に参加した。この活動から、生徒が安心して学校生活を過ごすためには、生徒一人一人が「大切」にされていると実感できることが重要と考えた。生徒が「大切」にされていると実感するためには、生徒の変化や成長に気づき、認めてあげることが重要と考える。そのためには、「授業」や「学級づくり」の中でどのような取組や工夫が行われているのかを、この教育実践演習を通して学びたいと考え、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　演習学級や授業の中での、先生方の生徒に対する声かけや関わり方を観察する。
イ　生徒と積極的に関わり、生徒の変化や成長を「気づき、認める」ことを実践する。
ウ　体験授業や研究授業での実践と考察を行う。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

生徒の変化や成長を「気づき、認める」ために、教育実践演習の約四か月という長期的な期間を活かして、授業内、部活動、時には生徒と学年の企画などを協働するなど、積極的に生徒と関わることを心がけた。また、体験授業や研究授業を通して、生徒一人一人の考えや発言を大切にして授業を展開していくことを心がけて演習を行った。

(2) 演習校で学んだこと

ア　生徒を「大切」にした授業

生徒を「大切」にした授業とは、生徒の考えや発言が大切にされている授業である。ただ、教師が提示した課題に取り組むのではなく、生徒の発言から「なぜそう考えたのか」と考えを深める発問を行うことで、生徒主体の深い学びが実現できると学んだ。

また、机間指導などで学習が進んでいない生徒に対する支援を行い、誰一人取りこぼさない授業を展開していくことも、生徒を「大切」にした授業と学んだ。なぜならば、指導教員の授業では個人ワークやグループの時に、学習が進んでいない生徒の支援を積極的に行うことで、その生徒は一時間の授業内容をしっかりと学習できていたからだ。

イ　生徒を「大切」にした学級

生徒一人一人が安心して学校生活をおくることができる学級は、担任や他者から「大切」にされることである。担任が、生徒一人一人を「大切」にするために工夫していた点は、朝学活の時間で普段と様子が違う生徒に対して、丁寧にかつ迅速に声掛けをしていた点である。このように、生徒一人一人の変化を見逃さないことが重要と学んだ。

また、終学活では班で一日の良かった点や改善点を学級全体で共有していた。このように、他者から良かった点が認められることで、生徒は安心感や学級が自己の居場所と実感できると学べた。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、京都府で展開されている教育を中心に、教員に求められる資質・能力を他の講座生と協働しながら学ぶことができた。その中でも印象に残っていることが二つある。

一つ目は、生徒指導の意義についてである。生徒指導とは、「悪い行いをした生徒」を正すイメージであったが、生徒が起こした事象のみを指導するのではなく、そのような事象を起こしてしまった生徒の背景や内面に迫っていくことが重要と学んだ。

二つ目は、「主体的で対話的な深い学び」の実現を目指した授業実践例である。私は、主体的とは「生徒が意欲的に取り組むこと」と安易に認識していたが、講義を通して、「問い」を自ら立てた上で、その「問い」に対する解決に向けた過程で自己に育まれた力を認識して、次の新たな学びへと向かっていく事が「主体的な学び」だと学ぶことができた。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

教師力養成講座では、専門的な講座や教育現場で実習を行うことを通して、より実践的に学ぶことができた。この経験を通して、私が成長した点は二つある。

一つ目は、生徒との対話を通して授業を創りだすことである。私自身、授業で大切なことは、教師が分かりやすく生徒に知識を伝えることだと考えていた。しかし、実習校での授業見学から、生徒との対話を通して学びを深めていく事が大切と学んだ。生徒との対話を通して学びを深めるとは、複数の生徒の考えを教師がファシリテートすることと考える。ファシリテートを行うことで、生徒は自己に無かった考えが形成され、深い学びを実現することができる。私はこの点に留意して、体験授業や研究授業で生徒の意見に対して、考えを深める発問や生徒同士の意見をファシリテートすることができた。

二つ目は、生徒一人一人に合った支援をすることだ。机間指導や体験授業、研究授業を通して、生徒の学習の進め方は多様であると学んだ。この学びから、その生徒にあった支援の方法を心がけた。また、学習が進んでいない生徒の支援のみに留まるのではなく、学習が進んでいる生徒に対しても、良い点を認めてあげられた。これにより、学習が進んでいる生徒も「自分を見てくれている」と実感して、自己肯定感が育まれ、次の学びに繋がると考える。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

私は、長期的な実習を通して、教師とは生徒の成長を間近で実感できる魅力的な仕事だと痛感した。私は同じ学年に四か月間、関わることができたため、授業内外で生徒の学習の成長をより実感できた。このように、生徒の成長に貢献できる教員になりたいと強く実感した。

(2) 今後の課題

私の今後の課題は授業力である。具体的には、生徒の考えを深める発問を熟考することと、自己の専門性の向上である。生徒に発問を行う際には、簡潔で明確な発問を心がける。不明確だと、生徒がどのような活動や学習を行えばよいかわからないからだ。

また、教材研究を徹底するとともに、授業後のＰＤＣＡサイクルを常に心がける。このようにして、生徒にとって理解しやすく、楽しい授業を展開できる教員を目指す。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「生徒にわかる喜びを感じさせる授業づくり」

受講生氏名：西村　奏

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) テーマ設定理由

大学の講義や学校ボランティアを通して、生徒一人一人に特性があり、支援を必要とする生徒が在籍していると学んだ。また、授業内容がわからず、学びに向かえない生徒がいると実感した。このことから、生徒の学びに向かう態度を育成するためには、わかりやすい授業による成功体験の蓄積が必要であると考えた。生徒にわかる喜びを感じさせるために、現場の先生方がどのような授業づくりをしているのか学びたいと考え、本テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　指導者の授業を見学し、工夫を知る

イ　授業時の生徒の反応や取り組み方を観察し、生徒一人一人の特性を掴む

ウ　先生方と生徒の関わり合いから知り得たポイントを基に、生徒と関わり理解に努める

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

学級の実態に合わせて、先生方がどのように授業をされているかを観察した。授業方法の工夫や生徒との掛け合いについて、気になったことは積極的に質問するようにした。また､授業中の机間指導だけでなく､授業時間外でも生徒一人一人と積極的に関わることで、生徒の実態や学級の雰囲気を掴むことに努めた。どのような授業が生徒にとって分かりやすく、興味関心を高めるのかについて、先生方の授業を見学する中で学ぶことができた。体験・研究授業を行う際には、生徒の立場に立った分かりやすい発問を意識した。また、興味関心を高めるための導入づくりを工夫した。ICTの活用では、ICTを活用することが目的ではなく、生徒の学習の補助にすることを目的として資料作りに努めた。

(2) 演習校で学んだこと

ア　机間指導の重要性

授業の一斉指導で重要な点をおさえられる生徒と、そうでない生徒がいる。そうでない生徒は、話を聞いていないのではなく理解できなかった生徒である。そのような生徒への補助は、机間指導時にするとよいと学んだ。また、生徒への投げかけ方の重要性についても学んだ｡国語の授業で問題がわからず困っている生徒にヒントを与えたものの、生徒に伝わらず理解を促すことができなかった。次に先生から与えられたヒントは、生徒のつまずきに即しており、その生徒は問題を解決することができた。このことから、生徒の立場に立ってわかりやすい投げかけ方を意識しなければならないと学んだ。

イ　生徒指導

生徒にわかる喜びを感じさせる授業を行うために、生徒との良好な関係性は必要不可欠である。そこで、先生方と生徒との交流を観察し、些細な変化に気付くことが重要であると学んだ。例えば、先生方は生徒の些細な気持ちの変化を汲み取り、その時々の生徒の感情に寄り添っていた。ただ寄り添うだけではなく、注意すべきことはわかりやすく伝えていた。そうすることで、生徒が先生に包み込まれているという感覚を抱き、信頼関係を築くことができると学んだ。そして、その信頼関係が土台となって、生徒が学びやすい環境を作ることができると学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、教員としての基礎知識を固めるだけでなく、京都府の教育の特色や取り組みについての理解を深めることができた。学校現場では、得た学びを意識して授業を見学したり生徒と接したりすることで、新たな気付きを得ることができた。

最も印象に残っている講義は、「第４回　中学校における生徒理解と学級経営」である。生徒を理解する要素の一つに、教室の環境を整えることが挙げられる。例えば、教室の後ろの棚に生徒のカバンや教科書などが乱雑に置かれている場合と、一切物を置いていない場合とでは、学級の雰囲気に違いがみられる。整った環境は学習の取り組みやすさに繋がり、生徒の学力を向上させるきっかけになる。また、掲示物を豊かにすると良いと学んだ。例えば、学年別で生徒同士の思いやりで嬉しかったことを付箋にまとめ、期間内に集まった思いやりの付箋の数を競う企画を開催する。生徒同士の思いやりを、付箋という目に見える形に表現することで、学級や学年の雰囲気をよりよいものにすることができると学んだ。

生徒一人一人の実態を掴むことはもちろん、学級や学年の環境改善に努めることが土台となって、生徒一人一人の個性や能力を最大限に発揮することができると学んだ。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 身に付けた力

本講座において実際に授業をさせていただき、生徒とともに授業を作りあげることの難しさと面白さを感じた。生徒とともに授業を作りあげるとは、生徒一人一人の意見を引き出し、授業の展開に繋げていくことであると考える。そのために、目を合わせて語りかけることを意識した。すると、生徒の表情から面白いという感情や分からないという感情を感じ取ることができ、その後の授業展開に活かすことができた。このことから、生徒の発言に対する切り返しや授業への繋げ方を身に付けることができた。

(2) 成長したこと

本講座を通して、教員としての自覚が更に強固なものとなった。授業を通して生徒と接することで、教えを説く責任の重大さと、教えることによる生徒からの信頼度の高まりを実感した。後期の実習では、生徒たちから「また戻ってきてね」や「絶対先生になってね」などの温かい言葉をもらった。この出来事から、これまで生徒を理解して気持ちや行動を受け止めるよう意識したことが、生徒との信頼関係に繋がったのだと実感した。生徒のわからない気持ちに寄り添い、わかる喜びを感じさせる授業ができる教員になれるよう努める。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座では、教員としてのやりがいや難しさなど様々なことを実感した。その中でも、生徒の成長を見届けることができる教師という職業のすばらしさを再認識することができた。また、教師力養成講座の事務局の方や演習校の先生方の手厚い支援をいただけたことや、教師力養成講座の16期生の仲間たちとともに学びを深められたことに感謝する。多くの方々からいただいた優しさを、京都府の未来を担う子どもたちへの教育をもって繋げていきたい。

(2) 今後の課題

演習を通して、これまで考えていたものよりも綿密な計画が求められると学んだ。その中には、あらゆる生徒に伝わるわかりやすい発問や、引き出しを増やすための徹底した教材研究がある。今後は、計画の重要性を意識しながらボランティア活動等で生徒と接する経験を積極的に積んでいく。生徒の興味関心を高める楽しくてわかりやすい授業づくりを通して、生徒にわかる喜びを感じさせる教員を目指す。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「学習や活動に対する主体的姿勢を育む支援方法」

受講生氏名：永田　翔大

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私がこのテーマを設定した理由は、生徒の主体的姿勢を育むための支援方法や取り組みを学びたいと考えたからである。生徒たちの前で授業をする機会が今までなく、「教師力養成講座」における「教育実践演習」が初めてだったので、先生方から学んだことを取り入れながら、自分ができるものを工夫し実践することを目標とした。

(2)研究方法

ア 授業内での担当の先生の生徒への接し方を観察する。

イ 担当の先生をはじめとする先生方へ聞き取りをする。

ウ 授業外での生徒との関わりおよび体験授業、研究授業における実践と考察をする。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

前期、後期ともに一年生に入らせていただき、それぞれの学級で実践されていた授業スタイルを見て、担当の先生がどのように主体的姿勢を育むための支援方法や取り組みを工夫されているのかを学んだ。さらに、自分が授業をするならば、どのように行うかを考えるように心掛けた。そして、体験授業や研究授業では、学習や活動に対する主体的姿勢を育むために、机間指導の際、グループワークにおける交流が進んでないグループやわからない子への支援を実践した。

(2) 演習校で学んだこと

ア　生徒の学習や活動に対する主体的姿勢を育むための支援の工夫

担当の先生の授業を参観させていただく中で、生徒の学習や活動に対する主体的姿勢を育むための支援の工夫として二つのことを学んだ。

一つ目は、生徒の疑問から授業を展開しているということだ。生徒たちの「知りたい」や「考えたい」という気持ちを引き出すような発問として、教材や資料をもとに授業の内容を考えることがとても大切であることを学んだ。

二つ目は、生徒の発言に対する教師の反応を充実させるということだ。生徒の発言に対して肯定的な反応をしたり、生徒の考えを引き出すために「なぜそう考えたのか」といった切り返しをする。そうすることで、生徒たちが自信をもって発表することにつながるだけでなく、さらに深く思考することにもつながっていた。

イ　生徒の実態に合わせた授業づくり

授業づくりをする際には、生徒の実態に合わせた発問やグループワークを取り入れたり、生徒が見やすくわかりやすい授業プリントを作ることが大切であると学んだ。

積極的ではあるが発言してくれる子に偏りがあるという生徒の実態に合わせて、グループワークを取り入れることで、他の人の意見を聞く機会を設けていた。

また授業スライドでは、資料や写真は大きくしたり、文字と写真を分けて視覚的に見やすくしたりするなどの工夫がみられた。

このように、生徒の実態に合わせることで、より充実した活動となり、生徒たちの学習意欲の向上につながることを学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座を通じて、講師の方々からこれから教員になる上で必要な知識や大切なことを学び、身に付けていくことができた。講座全体を通して、生徒たちのために教師自身が学び続ける必要があり、激しく変化し続ける社会を生き抜くために、主体的に学び考え、多様な人々と協力して何かを生み出してく力が必要であることを学んだ。講座でたくさんのことを学んだように、教員になっても常に学び続ける姿勢を持ち続け、変化を前向きに捉えていきたい。

また、講座での集団討論を通じて、色々な人の考え方や見方があることを改めて実感することができた。教員になった時には、多面的視点から物事を捉え、教職員の方々と話し合い、課題を解決していきたい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業力

「教師力養成講座」における「教育実践演習」での授業実践では、とても緊張してしまい、生徒の前で話すことが精一杯であった。しかし、授業を複数回させていただいたことにより、授業中に生徒の様子を徐々に見ることができるようになった。そうすることで、生徒の理解度に合わせた授業や生徒の特性に合わせた机間指導ができた。

また授業の構成を考える際には、ねらいを明確にすること、そのねらいを達成できるような授業展開を考えることが徐々にできるようになった。生徒たちに主体的に学ぶ姿勢をもたせるために、教材研究に励み、考えさせる授業を作っていきたい。

(2) 生徒理解

「教師力養成講座」における「教育実践演習」では、生徒理解の難しさに直面した。生徒たちの気持ちを汲み取って、コミュニケーションすることと授業を展開することの難しさを実感し、まずは生徒のことをよく観察することから始めた。具体的には、授業と授業の間やお昼休みに積極的に話したり、授業観察の中で、困っている子への机間指導をしたりした。そうすることで生徒との信頼関係が構築され、授業で積極的に参加してくれる子が多くなったり、授業内での対話が増えたりした。

今後も生徒のことを知ること、気づくことを意識しながら、臨機応変に生徒の実態に対応していきたい。

5　教職に向けた決意と今後の課題

教師力養成講座を受講することにより、生徒の成長に携わることができたり、学校業務に携わることができたりした。そして、教員という職業の魅力を実感することができ、以前よりもさらに教職に就きたいという思いが強くなった。しかしながら、課題点もたくさん見つかった。その中でも特に、教材研究をしっかりしなければならないと分かった。授業の内容に深みをもたせることで、生徒たちの深い学習につなげたり、教員として身に付けておく必要がある専門的な知識を学び続けたりすることが大事だと感じた。

教師力養成講座で学ぶことができたこと、教育実践演習で経験できたことはとても有意義なものであった。有意義であった時間を今後に生かしながら、学び続け、成長し続ける教員となりたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「学習指導の中で展開される生徒指導」

受講生氏名：公文代　一希

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

大学での学びや、ボランティア、教育実習を通して、小学校教育の流れを汲んだ教育を中学校でも一貫して行うことの大切さに気付いた。サポートセミナーでは、小学校で演習を行った。小学校では教科の時間に教科の力以前の児童の資質能力を指導する場面が多く見られた。教科担任制ではない小学校だからこそ顕著に行われる教科指導と生徒指導の一体化を前にして、教科担任制だからこそ、中学校でも教科を通して生徒の社会性や人間性を養うことが求められると思い、テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　現場を観察し、教員の実践を学ぶ

実際に、現場の先生方が教科の中で生徒のどんな力を育てようとしているのか、先生方とコミュニケーションを取りながら学ばせていただいた。また、授業中の生徒の様子から、どんな力をどのようにして育てるのがよいか考えた。

イ　授業実践の中で、生徒指導の視点を取り入れる

生徒の社会的資質能力をどう育てるかという視点を持ち授業を作った。教科の目標とは別に､活動や授業に対してどんな態度で挑み､どんな力を育んでほしいのかを設定し、そこに向けてどういった支援が必要かを考えた。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 社会的資質能力を育てる前提に必要な教員の仕事

現場の先生方や授業を見る中で気付いたことは、何を育てるにしても、まず初めに生徒一人ひとりをよく見取り、学級全体、学年全体の状況を把握する生徒理解が欠かせないということだ。実際に現場の先生方は、生徒のことをよく見ている。担任のクラスかどうかは関係なく、一人ひとりの強みや発達段階、課題を把握し、全体の方針となる目標を考えたうえで、そこに向けて必要な指導や支援に頭を悩ませていた。生徒をよく見て、理解することは教員にとって基礎中の基礎ではあるが、だからこそ、あらゆる教育活動の土台になってくるのだと改めて実感することができた。

(2) 子どもの学ぶ権利に向き合う環境づくりという視点

生徒理解の大切さを再確認した私は､より広い意味での生徒指導像を持つようになった。それは､生徒の学ぶ環境を整備することである。生徒指導の目的の1つを、学習集団の形成とするならば、いつでも、誰とでも、どんな状況でも学ぼうとする態度を育てていくことも必要であろう。だが、それと同時に全ての生徒が学びに全力で取り組める環境を整備していくことも教員の仕事ではないだろうか。私が授業を行った際、活動のためにグループを組ませた。休んでいる生徒もいるため、編成は私が決めた。話し合いに参加していない生徒に声をかけながら、無事終わらせることができた。その後、担任に「あの子はこっちのグループに入れてあげた方が集中できたかもね」と言われ、はっとした。集中して授業を聞けと生徒に責任を押し付けるのではなく、生徒が心置きなく授業に参加できるよう、教員に出来ることは全てやるということも、生徒指導提要に書かれている「安心安全な風土の醸成」につながる。子どもの学びを奪わない授業を設計することの大切さを知った。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

(1) 教育理念実現に向け教員に求められる資質能力

「夢・未来」講座では、教員に求められる資質能力を分野ごとに学び、考えを深めた。どの分野も大学で学んできたはずだが、現場を知っている先生方の言葉は、具体的な子どもの様子や、京都府の教育が抱える課題をイメージすることができ、実践の難しさや苦労も感じながらその必要性を学ぶことができた。また、集団討論も含め、多くの場面で他の講座生と意見を交流する場面もあり、１年後、教壇に立つことを目指す同じステージにいる仲間と、教育について話をすることで、新しい価値観に触れ、自分自身の教員像を磨くことができた。

(2) 理論を実践する教員が持つ教育への想い

講義を受ける中で、印象に残っているのは多くの先生方が「子どものために何かをしてあげたい」という思いを持って日々の教育活動を実践しているということだ。ICTを駆使したり、特別支援の視点を持ったり、生徒指導とは何か考えたりするのもすべては、子どもが成長するために出来ることは何かと考えた先にある。ただ、知識を蓄えていくのではなく、それを子どものために使うことに意味があると心に留め、挑戦し、実践していく。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 人とのつながり

教師力養成講座を通して、多くの先生方や、共に教員を目指す仲間に出会えた。これまでの私は、どちらかと言えば一人で黙々と課題に向き合うことが多かった。ところが、演習校の先生方は密に連携を取り、チームとして動くことでよりよい教育を行おうとしていた。私も早いうちから輪の中に入れてもらい、チーム力の大切さを強く感じた。それぞれが自分の役割を探し、動いていく先生方につられ、私自身も何ができるか考え行動できるようになった。何かあれば他の先生に相談し、助言を仰ぐこともできた。それは、講座生同士の場面でも発揮され、深い学びに繋がった。ここで出会った仲間を大切にし、互いに高め合うと共に、チームの一員として動ける教員になっていきたい。

(2) 生徒の学ぶ権利に向き合う態度

生徒指導に着目してきた中で、生徒の学ぶ権利に向き合う大切さを知った。多くの生徒が学びたい、成長したいと感じている。そう信じて、誰もが学ぶ意義を感じながら、授業に参加し、活躍できるよう、自分にできることを全てしてあげられる教員になりたい。私はまだまだ未熟だが、生徒の学ぶ環境を整えるという形で生徒の学ぶ権利に向き合い、授業で勝負していくんだという想いを持ち、温めることができたのは成長できた部分だと感じている。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

２月から５月という年度が替わる貴重な時期に、教員の一人として現場に関わることで、自分が教員となった際の１年後のイメージを膨らませることができた。たったの４ヶ月ではあったが、教職の大変さと面白さを多く感じることができ、早く教員になりたいという思いが強くなった。生徒にとって一番よい教育を実践できるよう今後も学んでいく。

(2) 今後の課題

毎授業で勝負できる教員になりたいと思ったからには、教科の専門性や授業を改善するICTの活用力、ユニバーサルデザイン等の知識を磨いていかなければならない。まだまだ自分の理想とは程遠いが、学生という身分を利用し、理論を学びながら現場に足を運び、どんな実践ができるか今後も学びを深め、イメージを膨らましていく。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「生徒が自分事として捉えることができる授業」

受講生氏名：西山　将真

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

第一に、社会科は暗記を目的にする生徒が多い傾向にあるからである。第二に、京都府の教育の現状として、「(基礎・基本の定着の一方)学ぶ楽しさ、学ぶ意義を実感できるような児童生徒の育成に課題」があるとされているからである。

これまで学生ボランティアなどで携わった生徒から、「社会科は覚えないといけないから苦手」や「一問一答さえすればよい」という暗記が前提の発言を多く耳にした。

以上から暗記を目的とした、学ぶ意義や楽しさを実感できていない生徒の現状に課題意識を持ち、演習テーマとして生徒が自分事として捉えることができる授業を掲げた。

(2) 研究方法

ア　過去と現在のつながりを実感させること

授業を担当する歴史的分野について、「昔と現在は関係がない」という意見を耳にすることが多かった。そのため、過去と現在のつながりを実感させる授業構成にすることで、自分事として捉えることができる授業を目指した。

イ　因果関係を踏まえて内容を学ばせること

歴史的事象とその名称をそれぞれ暗記するだけでは、当時の状況を正確に理解することはできず、学ぶ実感には至らない。ゆえに、生徒の主体性を担保しながら、単元、節、章につながりを持たせる授業構成とすることで、学ぶ意義の実感を目指した。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 社会科における自分事として捉えることと学ぶ意義の相関

明治の文化が流行した背景を、SNSの流行のメカニズムとの関連づけや当時の人物の現在も残る身近な功績と関連づけながら扱った。担当学年の社会科の授業ではメモ欄が設けられており、生徒は内容を整理し、メモ欄に書き綴った後に「今につながる」などの、説明にない自らの表現を付け加えていた。活動や課題を行うとしても欠かすことのできない説明の部分は、生徒の視点から興味・関心を引き出すことで主体的な学び、学ぶ意義につながると実感した。

(2) 道徳においても自分事として捉えることが重要だということ

担任の先生の道徳の授業を参観する中で、タブレットを活用して授業の主題に関する経験をしたことがあるかを尋ねていた。これにより、短時間で学級全体の意見を共有すると同時に、今回の問題は身近に起こり得ることだという実感につなげていた。道徳的価値基準を身につけるだけではなく、より深い学びにするために、自分事として捉えさせる授業を行う。

(3) 因果関係を踏まえることを通して、見通す力の育成を行うこと

演習期間中に歴史観について担任の先生と討論させていただいた。この討論の中で「伏線」の話題になった。今後の歴史的事象を踏まえた授業構成とすることで、生徒の「この前の出来事が重要なのか、つながるのか」と実感させているとのことだった。この討論を通して、歴史に関しては、全く同じ出来事は起こらないが、因果関係を踏まえて先を見通すことで、現代の諸問題へと活用できると実感させ、学ぶ意義につなげることが重要だと理解した。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、教育現場などで多くの経験を積んで来られた先生方から、学級経営、生徒理解、教員としての資質能力などの実践に基づく知識を学ぶことができた。また、グループ討議では、毎回、演習校や教科の異なる講座生と意見交流を行うことで、今後、同世代として京都府で教育を行う仲間とつながると同時に、幅広い視野を持つことができた。

私が「夢・未来」講座で特に印象に残ったのは、教育実践講座Ⅲの「中学校における生徒指導事例と対応」である。生徒指導とは生徒が起こした事象について迫るのではなく、家庭環境や本人の特徴といった内面に迫り、対応する必要があると学んだ。また、性的マイノリティについて、「少数派だから守る必要があるのか。少ないからではなく、該当する人々にとっては自分自身のことを普通だと思っており、その点で他の人とは変わらない」という言葉で自分の未熟さに気づかされた。多様性を認め、その人々の権利を守るという視点は重要であるが、心のどこかで多数派だから少数派を守る必要があるという意識があったと振り返る。今後も急速な社会の変化に伴い、価値観の変化は起こり得るため、常に自分の道徳観や考えを見つめ直し、学び続けていく。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 他者とのつながりを大切にすること

教師は生徒と日常的に関わり、生徒指導を行うことが重要だと第７回講座や演習から学んだ。また、保護者とは同じ方向を向き、生徒の成長に共に携わることが重要だと、第７回、第12回講座や演習を通して実感した。

また、教師は表向きの仕事だけでなく、事務作業や整備などの裏での仕事が多く存在する職業である。このため、いかなる場面においても、教師間で連携し、円滑に業務をこなすことや情報共有を行い、協働的に生徒指導を行うことが重要だと学ぶことができた。今回の養成講座を通して、様々な人と関わり、学びに繋げることができた。このつながる力を大切にして、教員になった際に他者と絶えず関わり、より良い教育活動を行う教師となりたい。

(2) 生徒の実態を掴むこと

私は教師力養成講座以前に学生ボランティア、学習支援員、部活動指導員などで演習校とは異なる学校で現場に携わってきた。今回の講座おいても、学年、学級を問わず多くの生徒と関わり、演習を行った。この経験を通して、学校が変われば生徒の様子も大きく異なることもあり、学校内においても様々な生徒がいることを実感し、改めて画一化された教育方法などはなく、生徒一人ひとりの実態に応じた教育が重要だと感じた。教員になった際にも、その場で関わる生徒一人ひとりを見て、学校の実情、生徒の実態に応じた教育を行っていく。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座では、実践に基づく知識や現場での経験を得るだけでなく、教職への思いを強めることができた。授業などの表向きの業務と共に、校務分掌や事務作業などをこなす必要のある大変な職種だと実感した。しかし、同時に、生徒の成長を身近に感じ、一年目から先輩の先生方と同じ土俵で働くことができる、やりがいのある職種だと感じた。生徒に寄り添い、成長することができる教員を目指し、講座修了後も経験や努力を積み重ねていく。

(2) 今後の課題

今後の課題は、より授業力を向上させることである。同じ内容の授業を複数学級で行う際に、同じ授業を行うことを意識したとしても、浸透具合や反応が異なることがあった。授業の反省の中で、授業は水物だと教えていただいたが、今後教師となる上で成功と失敗の幅を小さくし、「プロ」の教師となるため、教材研究や現場での経験を積み重ねていく。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「生徒との関係を向上させるための教員として
コミュニケーションのあり方について」

受講生氏名：松浦　裕樹

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

中学校生活の三年間とは、体だけでなく心の発達が著しい期間である。また「人として生きる力」が大きく成長する期間でもあると考える。生徒にこのような力を育てるにあたって、多くの人と関わる中で、生徒のアイデンティティを確立するように支援することが重要であると考える。そのためにも、教員として生徒一人一人との信頼関係を高め、生徒の成長をサポートする、生徒ともに教員としても成長する必要性があると考え、今回の研究テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　授業内において、教員の生徒への声かけや接し方などを観察する。
イ　休み時間における生徒と教員の関わり方を観察する。
ウ　観察で気付いたことや考えたことを学校生活全般で実践する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

前期後期と違う学年で演習させていただいた。多くの生徒と関わる機会があり、その中で、前期では、年度末ということもあり学級環境が整っている中で、新たな教員として生徒との信頼関係を構築するために、また次の学年に向けた心の成長に寄り添うことができるようなコミュニケーションを心がけ行った。後期では、新たな年度ということもあり、クラスの雰囲気や環境などが整っていない中で､生徒とともに学級づくりを行えるように、また少ない演習期間の中で信頼関係を深めていけるようなコミュニケーションを意識して行った。

(2) 演習校で学んだこと

生徒との信頼関係を構築するにあたって、特に大切にすべきと学んだ点が二つある。

まず一つ目に、生徒の良いところを伝えることである。数学の授業において、問題に一生懸命取り組み答えを導こうとする姿勢であったり、部活動の指導においては、仲間と協力し目標に向かってひたむきに頑張っている姿など、一人一人の生徒の頑張りや姿勢などを認め伝えることで、生徒自身の自己肯定感を高めることができると考える。どんなに小さなことでも生徒にポジティブな気持ちになってもらえるようなコミュニケーションを行うことで、信頼関係を構築することができると学ぶことができた。

二つ目に、教員としての前に人として生徒と向き合うことである。私自身がどういった人であるのかを生徒に伝え感じてもらうことで、信頼関係が築かれていくと感じた。生徒の前で、着飾ることなく自然な自分を見せることで、自然に生徒が気持ちや考えを伝えてくれるようになった。生徒も一人の人であるからこそ、人としての信頼関係を築けるようなコミュニケーションを行うことが大切であると学ぶことができた。

このような二点を大切にしながら、生徒一人一人に合ったコミュニケーションの取り方を意識して、教員として人として、生徒と向き合い信頼関係を深めていくことを大切にしていきたいと考える。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、教育課題や生徒の実態などをもとに、教職員としてどのように対応すべきなのかや京都府の教育方針などを、多くの専門家や教職員の方々に講義していただき学ぶことができた。また講座の中で、他の受講生とグループワークを行う中で、自分では思いつかない、新たな考えや価値観などに触れることができ、それらを通して視野を広げることができ、また自身の考えを深く広いものにすることができた。

その中でも特に、「中学校における生徒理解と学級経営」では、私自身が教員として大切にしていきたいことや研究テーマと繋がっており、講義を通して大切にしていきたいことや専門性を深めるためにどのようにすればよいかについて考えることができた。学級経営において、普段の学校生活を通して「人として生きる力」を高めることができる機会であるため、教員として生徒が成長できるような手立てを行うことの大切さを、改めて学ぶことができた。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1)　生徒を理解する・気付く力

授業中や普段の学校生活から、生徒一人一人と積極的にコミュニケーションを取る中で、生徒を理解する力と小さな変化に気付く力を身につけることができた。これらの力は、教員として生徒を育てる立場としてとても重要な力であるが、学生の間では、あまり身につけられない力であると考えていた。しかし、演習において生徒と多くの時間をともにする機会を通して、一人一人接し方は違うが、私自身と生徒の信頼関係を大切にしていくことが重要であると考える。また多くの先生方からの具体的なアドバイスや方法を教えていただき、実践する中で身につけることができた。

(2)　探究心

成長したこととして、学んだことや自分を生かせることを教育実践へと結びつけることの重要性を改めて実感した。自分のスタイルを確立するのではなく、日々探求し続け改善し向上していくという考えを学ぶことができた。それらを通して、各学級に応じた教育方法を考え、柔軟に対応できる力も身につけることができた。授業などにおいて、全ての生徒が全ての時間、しっかりと理解することは難しいと考えるが、生徒とともに考え生徒を認め伝える活動を通して、教員としての自覚が芽生え、責任感を持って仕事することができたことは、貴重な経験となった。これらの経験の中で、未熟な部分を見つめ直すことができ、それらを改善することができるよう、探究心を忘れずにいたい。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1)　教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、全ての教職員が持っている生徒を育むという大きな責任の中で、生徒とともに育つ楽しさや新たな刺激を受ける日々を経験することができ、また教職員ならではのやりがいを感じることができたことにより、教員としてのより具体的なイメージとこのような教員になりたいという夢を持つことができた。生徒を主語として何事も考えるようにし、私自身も生徒とともに成長し、生徒の自己肯定感を高められるよう、そして、生徒の「人として生きる力」を高められる教員になりたい。

(2)　今後の課題

今後の課題として、授業力の向上とICTの活用である。授業力の向上に関しては、生徒に何を学ばせたいのか、何を身につけて欲しいのかを第一に考え、生徒が意欲的に取り組むことができるような授業を行いたい。ICTの活用に関しては、生徒目線で「〜するためにICTを使う」といった視点を持ち、積極的に活用して、これからの社会を担う生徒を育てていけるようにしていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「生徒のみとりと発問の工夫について」

受講生氏名：黒田　義一

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私は、教育実習、学生ボランティアなど実際に学校現場で演習をさせて頂いたときに、あらゆる教育活動は生徒理解をもとに行われていることに気付き、生徒理解の重要性を感じた。これまで生徒を観察し関わりながら、なんとなく生徒を理解した気になっているのではないかという疑問を契機として、具体的にどのような視点で生徒を見取っていけばよいのかということと、特に授業において生徒の実態に合わせて行われる発問の工夫について学び、自分の中でその方法を確立したいという思いからこの演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　視点を定めて生徒の学校生活の様子を観察する。自分の生徒理解と他の人の生徒理解を比較し、見取りの視点を明らかにする。

イ　授業内で生徒理解に応じてどのような発問がされているかクラスや学年で比較する。

ウ　自身の生徒理解に基づいて、生徒の反応を予想し授業での実践を行う。

エ　授業を振り返って、生徒理解を実態と比較し、働きかけが適切であったかを検討する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期の演習は第一学年、後期の演習は第二学年で演習を行わせて頂いた。また、理科の授業については、全学年通して他の先生の授業も見させて頂いた。まず、学年やクラスに同様な特徴があるのかということを観察や先生方から教えていただき知った。そして、配属クラスについては特に、どの生徒がどのような特性を持っているのか個々にも注目して演習を行った。その上で、先生方が授業においてどのような発問の工夫をされているのかを中心に、生徒の実態に合わせて、授業展開、働きかけ、支援をどう工夫されているのかということについても学ばせて頂いた。以上の実践を基にして、後半の演習では、そこで学んだことを活かし、実際の生徒に合わせて発問を工夫して授業の実践を行った。

(2) 演習校で学んだこと

ア　情報の共有

常に、教員同士で沢山の情報共有がされていた。それは一人ひとりの生徒について授業で見せた生徒の姿や日常生活の何気ない様子でもあったりした。些細なことに思えるようなことから様々な視点で生徒を見取ることが全体での生徒理解につながると学んだ。四月の学校が始まる前後では沢山の学年会議、職員会議などがあって、その中でも生徒の情報共有がされていてどのように支援をしてくかの方向性が定められていた。みんなが生徒に対して同じ情報を共有しているだけでなく、その生徒に必要な力を身に付けていくための支援の方向性を同じにしていくことがチーム学校として重要であると感じた。

イ　教師の働きかけ生徒の実態

同じ授業の内容、教科であってもクラス、学年が異なれば、教員の支援の仕方や授業の展開が異なっていた。その生徒にとって何が大切かを考えて行われている働きかけであると同時に、何を教えるのかの前に、誰にどう教えるかが重要であることを示しているように感じ、生徒理解と、生徒に合わせた授業の大切さについて学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

様々な講義、講座の中、そのたびグループやペアで話し合ったり、同じ受講生の意見や質問を聞いたりすることでより学びを深めることができた。その中でも特に、自分の中で気づきと学びが大きかったと感じた一人ひとりの子どもを主語にすることと学習指導要領に対応した評価について述べる。

一人ひとりの子どもを主語にすることは目指すべきであることは講義を受ける前からも考えていたことであった。しかし、これまでの教育の理論や指導法について学ぶに従って、理論的にこうすればよいはずだ、このような働きかけで生徒の発達を促そう、これを使って興味を持たせようという考えが先行し、主語が教師になっていたことに気付いた。そして、この考え方は一般に効果的な学びや授業展開であっても実際の生徒にあった学びになっているかという視点に至りがたいと気づいた。常に教師としてどんな働きかけをしてくべきかを考えながらも、それを誰に教えるのかという視点を忘れずに教育活動に取り組んでいくことが重要であると学んだ。

もう一つが学習指導要領に対応した評価についてである。この講義において、まず、学習面では一定の水準を確保できているが、学ぶ意味を実感できていない生徒が多いという現状を知った。その中で、主体的に学習に取り組む態度を評価する意味に気付いた。この観点を評価していきながら、教科としての魅力や学ぶ意味を感じられるようにすることが今の生徒にとって重要であると学んだ。それと同時にその評価の難しさも感じた。評価の観点から逆算して授業を考えていくことも一つの手段であることを学んだ。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 生徒の見取りの視点

様々な授業での生徒の様子、グループでの役割、学校生活での姿を観察し、関わっていく中で、一人ひとりの生徒がどのようなことが得意で苦手としているのかなど個性や特性が見えてきた。関わる時間の長さが生徒理解につながっただけでなく、一人の生徒に対してどのような視点で見ているかを先生方に教えてもらったり、実習生同士で共有したりする中で分かってきたからである。

(2) 生徒の反応を予想した授業づくり

生徒理解を基にして、授業においてどのような生徒の反応があるかを予想し、発問を工夫し授業を考えることができた。実際の授業においての生徒の反応と予想を比較し、今までの自分の生徒への理解を改めることができ、生徒の予想が教師の働きかけや授業の展開によって変わり得ることに気付いた。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、自身の教員を志す思いが増すとともに自分が教員として働く際の姿が明確になったと思う。今まで、現場の先生方のやり方や考え方を知識として得ることが多かった。ここでの経験で、自分ならこの生徒にどう関わるかと自分事として考えれるようになってきた今、これまでの実習生としてではなく、教員として、一人ひとりの生徒を理解しどのように関わっていくかを考え、実践していける教員を目指したい。

(2) 今後の課題

私の今後の課題は、自分の軸を定め、自分の育てたい生徒像、なりたい教師像を確立することである。演習を重ね学ぶほど、大切なことが自分の中で沢山出来てきた。その中でも自分は何を最も大事にして生徒を育てていくのかという核になる部分を見出し、それ軸として努力し、学び続けるような教員となりたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「生徒の気付きや、意欲を活かす授業づくり」

受講生氏名：上村　ちひろ

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

生徒の些細な「気付き」「意欲」には、その後の学習を支えたり、授業の質を高めたりする多くの創造的な要素がある。その些細な「気付き」「意欲」を教師自身が受け止め、認め、向き合うことによって、生徒の学びに主体性が生まれ、生徒自身の思いや願いを実現するための学びに結びつくものと考える。生徒の些細な「気付き」「意欲」に支えられた対話をする機会を増やすことによって、生徒の能力を引き出す授業の実現につながると考えたため、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　配属された学級での担任の先生の生徒への接し方を観察

イ　生徒理解のための生徒の様子の観察

ウ　生徒と授業や休み時間を通してできる限り多く関わり、一人一人の特性を把握した上での授業実践

エ　気づきや思いを自由に表現できる授業づくりの実践と考察

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

まず、日々の授業見学や机間指導、授業実践に力を入れた。日々の授業見学の中で、教師と生徒の会話などの観察を行い、気づいたことはすぐに書き留めていくことを心掛けた。また、休み時間なども積極的に関わり、生徒理解に努めた。

(2) 演習校で学んだこと

生徒の「気付き」「発見」を見取るためには、教師の日頃の生徒との関わりと教材研究が大きく左右することを学んだ。日々の生活、授業を通して、個々の魅力を引き出すために次の２点を大切にすべきだと学んだ。

１点目は、生徒達の反応への切り返し方である。生徒は、発問に対して様々な反応を示す。中には、予想していなかった反応もあるが、そこで大切になるのは、教師が想定していた流れに生徒をのせるのではなく、生徒の反応を束ねて、最終的なゴールを目指すことである。そのためには、生徒の反応をより多く想定し、それぞれに対する切り返し方を検討しておくことが重要であるということを学んだ。

２点目は、授業の構成の面である。その授業の単元の目的を達成するためには、「振り返りで生徒にどのような内容を書かせたいか」をまず想定したうえで、そのまとめから逆算的に授業を構成し、目的に応じた活動を取り入れることが重要であると学んだ。また、逆算的に授業を構成することで発問も明確になり、学びの道筋を作りやすくなると学んだ。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

私は、夢・未来講座で、京都府の教育を担う上で欠かせない知識や資質・能力、これからの教育について学ぶことができた。さらに、同じ志を持つ仲間と意見を交流することで、自分が持ち合わせていなかった新たな視点や考えを持つことができた。特に印象に残っているのは、第７回の「中学校における生徒指導事例と対応」である。生徒指導では、状況に応じた指導が大切であると理解していたが、新たな生徒指導とは生徒の自己肯定感や、自己指導能力を養う機会であるということも理解することができた。問題行動が解決して終わりではなく、指導を通して生徒がこれから自分の力で前向きに進んでいけるように指導したい。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業実践力

教師力養成講座全体を通して、ICTを活用した授業を自分自身が初めて経験し、実践する力が身に付いた。これまでは、ICTを活用した授業と言われていながらもなかなか具体的に想像し、実践に向けての手立てを考える機会が少なかった。しかし今回、自分自身がICTを活用した授業をすることで、便利さを実感する一方、難しさも痛感した。同時に、ICTの活用をさらに身近に感じることができた。

(2) 生徒理解

教師力養成講座生として最初の頃は、コミュニケーションの難しさが一番大変であった。中盤になると、授業を進めることのほか、学習に支援が必要な生徒への声掛けなど、広い視野で学級全体を見ることに難しさを感じた。その中で、なかなか全体に目を配っているようで配れていなかった自分に気付き、机間指導を多く行うことや、生徒とたくさん関わることを心掛け、呼びかけや発問の工夫等ができるようになった。

5　教職に向けた決意と今後の課題

私はまず教員になるうえで大切なことは逆算する力であると考える。生徒達に中学校の三年間でどのような力を持って卒業してほしいのか逆算する力が必要であると考えた。そのために、私が生徒達にどのようなことを伝えたいのかを深く考える必要がある。

生徒達は一人一人違い、尊い存在であるので、その生徒達を成長させるためには教員である自分自身も様々な経験をし、多くの引き出しを持っておく必要があると感じた。私は今の学校現場において、生徒達が正解主義や、同調圧力があるように感じた。やはり、自分も正解を求めすぎて、周りに合わせてしまいたくなる気持ちがある。しかし、生徒達の一人一人の個性を大切にするためには、様々なことに挑戦させ、探究させていく必要があると考える。生徒達に教員が敷いたレールを歩かせるのではなく、自分で自分に合った学習を生徒達自身が発見していく必要があると感じている。また主体的に学び続けなければならないのは生徒達だけではない。教員も目まぐるしく変わる教育業界を前向きにとらえ、その変化に対応して、生徒達に最適な学びの場を提供していける教員を目指していきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「生徒全員が参加する授業づくり」

受講生氏名：佐々木　菜月

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私がこの演習テーマを設定した理由は、生徒が授業へ意欲的に参加するにはどういった授業づくりが必要なのか考えて、今後の活動に活かしたいと思ったからである。私が教員養成サポートセミナーを受講していた時、教室の後ろ側の生徒たちが授業を聞いていないことに気がついた。どうしたらこの生徒たちは意欲的に授業に参加することができるのかと疑問に思った。教師力養成講座では、生徒目線に立って授業作りについて学び、教員目線で実際に授業をし、教員となったときに即戦力として働きたいと考え、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

ア　授業観察

演習校での授業観察では、導入・めあての設定・発問の工夫・指示の仕方・机間指導・授業のまとめかたを観察する。

イ　体験授業と研究授業

体験授業と研究授業を経験する中で、生徒がどのような態度・意欲で授業に参加しているかを観察する。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

私は、教科を問わず演習校の先生方の授業を積極的に見学し、導入・めあての設定・発問の工夫・指示の仕方・机間指導・授業のまとめ方を観察した。さらに、私が授業観察をする際には、授業中の生徒の様子を観察することを心掛け、演習テーマを意識した授業観察を行っていた。そして、演習校の先生方が授業をする上で心掛けられていることを質問したり、私自身が疑問に思ったことは積極的に先生方に質問するようにしたりした。

また、授業観察で学んだことを活かして、演習テーマを意識しながら、体験授業に臨んだ。体験授業を行う前は、演習生同士で模擬授業を行い、より良い授業へとつながるように協議した。そして、模擬授業と体験授業の反省から、より生徒が意欲的に参加できる授業にするには授業をどのように改善したら良いか考察し、研究授業に臨んだ。

(2) 演習校で学んだこと

演習校で演習する前までの私は、生徒全員が参加する授業の基盤としてわかりやすい授業が一番大切だと思っていた。しかし、演習校の先生方の授業を観察したり、先生に質問したり、生徒たちに授業の感想を聞いたりすることで、必ずしも教員の教えるスキルが生徒の興味関心に影響する訳ではないと考えた。生徒が授業に興味を持つのは、生徒たちの興味がある事柄や生徒の身近な事柄を取り扱って、教員がより生徒の興味を惹きつけるように、対話的な活動をしているときであることだと気がついた。また、生徒の活動する場があればあるほど、生徒は授業に対して意欲的になり、生徒の考えが深まる授業になっているように感じた。

つまり、生徒の日常と授業を結びつけて生徒に興味を持たせ、生徒が活躍する場を作ることが「生徒全員が参加する授業づくり」の基盤となることがわかった。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、主に京都府の教育の在り方と令和の日本型学校教育について学んだ。この講座での学びは、教員になる上で必要な知識や基盤であり、教員となったときに必ず活きる学びであった。第２回目の講座では、第２期京都府教育振興プランで京都府が目指している教育の在り方について学んだ。そこでは、主に京都府の教育の基本理念の目指す人間像と、はぐくみたい力、教育に関わるすべての者が大切にしたい想いについて学び、演習校での実践や教員となったときの実践にどう活かしていくのか、講座を通して考えた。

また、第２期京都府教育振興プランだけでなく、他にも生徒理解と学級経営の方法や、授業実践、生徒指導、特別の教科　道徳、人権問題、学習評価、特別支援教育について幅広い京都府の教育内容について学んだ。

そして、私がこの講座を受けて、特に印象に残っている講座は、第８回目の「特別の教科道徳」である。その講座では、講師の方に対話的な学びを意識した授業実践をして頂いた。講師の方が演習生の意見をたくさん引き出して授業を進めていく姿を通して、私たち演習生にはまだまだ学ばなければいけないことがたくさんあり、講師の方から授業力や実践方法などたくさんの学びを頂いた。今は全力で自身の能力を伸ばしていくことが大切であると感じた。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1)　生徒理解

私は、褒めると生徒が喜び、成長すると思っていたため、授業観察の際にひたすら生徒を褒めて生徒の学習支援を行おうとしていた。しかし、素直な生徒は褒められたことへの安心感から次の目標を失っている様子が見られ、褒めるだけで活気づき成長する生徒と安心して自分の成長を止めてしまう生徒がいることがわかった。個々に合った指導を経験して、生徒を導く力を微力ながらに身につけることができた。

(2)　与えられる側から与える側へ意識の変化

演習が始まった頃、私は学生気分が十分に抜けておらず、積極的な行動ができないでいた。最初の方は生徒たちも私に興味を持って話かけてくるが、時間の経過とともに私への興味関心は薄れていき、私は生徒との距離感に悩むことになった。そんなとき、指導教員から積極的にこちらからアプローチをする必要があると助言を頂き、与えられる立場ではなく与える立場にいることを自覚し、自ら行動するようにした。それから、慣れないことをして失敗をすることもあったが、演習の最終日までこの意識のまま活動し続けることができたことはきっと私の成長に繋がっているだろう。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1)　教職に向けた決意

私は、教師力養成講座での「夢・未来」講座と演習校での実践的な活動を通して、教育の素晴らしさと進化し続ける教育の在り方に心を動かされた。子どもたちの成長を見守り、支えていく仕事はとてもやりがいのあるものであり、進化し続ける教育は未来が明るく感じられるものであった。個に応じた指導と協働的な学びを充実させ、未来を担う子どもたちを支えられる教員になれるように、今後も努力していきたいと思う。

(2)　今後の課題

教師力養成講座で学んだことをこれからどのように活かすかということが私の課題である。教師力養成講座に関わって頂いた方々に精一杯の恩を返すことができるよう自分の目指す理想の教員になり、教育に携わっていきたいと思う。今の自分に満足することなく挑戦し続け、より多くの知恵や経験を得るために、チャレンジし、学び続ける姿勢を維持していきたいと思う。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「生徒が主体的・対話的に考える授業と学級経営の行い方」

受講生氏名：納谷　駿輔

1　演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

近年ではAIやICTなどの発達により、人間が仕事に必要な力として挙げられるようになったのが、問題発見力や革新性などであり、知識をしっかり習得するだけでは社会では必要とされなくなった。これによって、教員が一方的に教えるだけでは深い学びにならないので、生徒が自分自身で考え、気付きを促していく授業づくりが必要となってくる。学級運営についても、生徒たちが自分たちでより良いクラスを作っていき、教員はそれをサポートしていくことが重要だと思う。これを実現するために、どのように学級経営をしていたのか知りたいと感じた。

(2) 研究方法

授業中や休み時間など、様々な場面で教員の方々の動きや発言に注目して行う。英語だけでなく様々な教科の授業を拝見させていただき、気付きを促すために「どのような工夫やアクティビティーを行っているのか観察を行う。英語という教科は得意と苦手がはっきりする教科であるので、苦手な生徒に対してどのようなアプローチをしているのか、観察し話を聞かせてもらう。また、学級運営については朝学活や昼食指導、掃除など様々な学級活動の中で教員がどのような工夫をしているのか、そして自分が担任ならどのようなアプローチをするのか考えながら観察を行う。

2　演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

授業を行う中で、どのような言語活動を行って、その活動によって生徒にどのような力をつけてほしいのかを常に考えながら授業を行った。

どのような言語活動が効果的であるのかを考えるために、朝学活や、終学活、休み時間など、生徒たちの普段の様子を観察したうえで判断した。

演習中では、多くの英語の先生の授業を見学し、自分の授業に取り入れようとした。また他教科の授業を見学する中で、他教科では生徒たちにどのような発問の仕方をして、生徒たちに発言させているか確認した。

演習校には、様々な環境で生活している生徒や、様々な悩みを抱えた生徒がおり、その生徒たちを取りこぼすことなく、授業に参加していけるような工夫を考えた。

(2) 演習校で学んだこと

授業内の工夫について

全く同じ発問でも学級によって反応が異なるということを知り、１クラスごとのそれぞれの特徴をつかみ、それを考えたうえで授業を作っていかなければならないこと。

授業内の規律については、特に入ってきたばかりの１年生は授業でやってはいけないことを明確に示したうえで、授業をやっていくことの重要性を学んだ。

研究授業では行った言語活動を生徒が楽しみながらやってくれたことはよかったが、説明に苦労したので、短く簡潔に説明をする術を身に付けていきたい。

学級経営については生徒が一人一役係を持つことの重要性を学んだ。役目を果たすために生徒それぞれが声掛けをしていたので､それが生徒の主体性につながっていると感じた。

3　「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では京都府教育委員会がどのような方針で教育を行っているのか、教員としてどのような力を持つことが求められているのかを学ぶことができた。特に私は、ICTについて多くの不安があり、どのようにして使っていけば効果的に使えるのかわかっていなかったので、どのように使えば主体的に生徒が学ぶことができるのか理解することができた。

新型コロナウイルスの流行や、ICT機器の発達によって、当たり前のことだったことが当たり前じゃなくなってしまったこの変化が激しい時代において、生徒が今後身に付けていく力は大きく変わっていっていることを実感した。そして私はこの変化を前向きにとらえて、授業においても生徒指導においても変化をつけていかないといけないということを学んだ。教員として私は常に学びを止めることなく、正解ではなく多くの人が納得することができる納得解を見つけていける教員になれるようにする。

最後の講座でICTについての講義があったが、そこで印象的だったことはタブレット端末を能動的に、積極的に使っていくことで、クリエイティブな授業を実施することができ、生徒たちに独創性をつけることができるということである。今後社会に必要な力としては知識の習得だけではなく、問題発見能力や革新性が求められている。このような力をつけていくための一つのツールとしてタブレット端末はとても効果的であると感じることができた。

4　教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

教師力養成講座が、学生ボランティアを除いて、生徒と深くかかわる初めての現場だったので、とても緊張し苦労した。実際に生徒の前で授業を行っていく中で、多くの課題を見つけることができた。自分が思う最も大きな課題は一つ一つのアクティビティーに目的意識を持てていなかったことである。生徒たちにどのような力をつけさせるためにその活動をするのか、細かいところまで詰めることができずに、ただやっているだけになった活動もあった。今後は単元ごとにしっかり目標を立てて逆算して、授業計画を練っていく必要があることを学ぶことができた。

私は教員として以前に一人の社会人として成長していく必要があると感じた。演習中でも先生方への報告・連絡・相談が遅れてしまったり、パソコンをうまく使いこなすことができずに、何度も指導してもらったり、授業の中での言葉遣いなど、社会人として、当たり前なことの指摘もしていただいた。何事においても、常に生徒たちの手本であるのが教員であるし、今すぐに日常生活から見直し、手本になれるような教員になれるように努力していきたい。

5　教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

まずは、京都府「教師力養成講座」を通じて、教員になりたいという思いがより強くなった。特に学校演習を通じて、多くの子どもたちと関わり、同じ時間を過ごしていく中で、苦労することも多かったが、それ以上に楽しみややりがいを感じることができた。私は教員として学び続けることが大切だということを学んだので常に向上心を持ち、何事にも、積極的に挑戦し、常に変化を前向きにとらえ、新たな価値を作り出せるような教員になれるよう今後も努力を重ねていく。

(2) 今後の課題

今後の課題としては、授業力の向上である。今回の演習では何度も授業をさせてもらった。その授業の中で、まだまだ、効果的な発問はできなかったので、教員になってからも、生徒が主体的・対話的に授業に取り組めるようにするにはどうすればいいのか、考え続けていきたい。